保育者養成における表現技術指導の事例と考察

幼児音楽　基礎技能から保育の表現技術への転換事例と考察
幼児美術　粘土造形表現活動の事例と考察

篠田　美里（芸術学・音楽）・中島　法晃*（芸術学・美術）

はじめに

保育所保育指針の改定に伴い、保育士養成課程の改正が平成23年度入学生から実施された。「基礎技能」に関しても、今回の改正で「保育の表現技術」となった。この主旨を反映すべく指導方法を工夫するために、昨年、「幼児音楽」の授業内容を検討し、今年度からは、新たな内容と配列で「幼児音楽」を開講している。本稿では新しい内容で取り組んだ事例を報告する。

「幼児美術」に関しては粘土という材質を使用した表現活動の事例を報告する。

尚、「幼児音楽」に関しては篠田が、「幼児美術」に関しては中島が、それぞれ執筆を担当する。

Ⅰ）幼児音楽
基礎技能から保育の表現技術への転換事例と考察

「幼児音楽」では、ピアノ演奏技能の習得を中心に授業を構築してきた。それは、就職試験にはほとんどの保育施設がピアノの課題を課しているからであった。本学設定の幼児音楽Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ（必修1単位（※1）選択5単位計6単位6コマ）の中で各期1コマの計4コマはピアノに当てるとその他の音楽科目（理論・声楽・合奏など）の配分時間が難しくなるので、1コマに2科目（理論とピアノ･声楽とピアノなど）を学べるように配列の工夫をし、多種類の科目を学べるよう工夫してきた。しかし、技能の習得に偏り、子どもとどのように音楽を楽しむか、音楽を通してどのように感性を豊にするのか？等の部分への時間配分が十分にできなかった。

2004年から開設した子育て支援活動「あそびの森」を進めるにつれて、遊びを通して様々な音楽の要素が求められるようになった。それは、まさに今回の新たな「保育の表現技術」への転換の主旨と共通する部分であった。これらを鑑み、平成23年度入学生からは、「幼児音楽」という授業科目名は変えなかったが、学習内容をがらりと変えた。

本稿では本年度前期に開講した「幼児音楽Ⅰ・Ⅱ」の内容と事例を中心に報告する。

Ⅰ　現状

1）学生の入学までの音楽履修状況

本学入学生の入学時におけるピアノ実技履修状況は1998年（筆者が幼児教育の学生の指導を始めた年）から少しずつ初心者の（※2）増えが続き、2010年入学生は43%、2011年度入学制は46%と約半数となった。それに対して、上級者（※3）は一貫して5%前後に留まっている。一方で、ブラス楽器の経験者は2010, 年入学生15.4%、2011年入学生20.3%と増えている。新傾向として、ピアノに関しては、履修体験があっても、練習に時間を費やす体験が無い（習いに行った先でその時間だけピアノに触れるが自宅では何もしなかった）学生が増えている。この学生も入れると初心者は60%近くになると言える。

2）履修（指導）時間

各学期に課せられた課題を習得するに当たって、指導可能な時間は、幼児音楽Ⅰ・Ⅲにおいて必修90分×15回、選択Ⅰ90分×45回、である。

（さらに、選択Ⅱとして90分×30回があり、ここでリトミックやマリンバ等の楽器の演奏技能を身につけ、音楽力を向上させる時間がある。）

*本学非常勤講師

3）指導教員

常勤2名と非常勤17名で幼時音楽Ⅰ・Ⅱ・Ⅲを指導する。

Ⅱ　保育者養成校としての目標

保育者養成校として2年間でどれくらいの力をつけて現場に送り出せるかは就職に反映してくるため、音楽に関しては、基本的なピアノ演奏力を身につけてほしいと願う。そして、「ピアノが弾けなくて毎日の保育が辛くなる」事の無いよう、ピアノに頼らない対処法や音楽指導に必要な基礎力もつけて送り出したいと考える。

1）ピアノ演奏技能の習得ライン

本学が課している2年間での最低単位認定ライン（2011年の場合）は以下の通りである。

① ハ長調、ヘ長調、ト長調、ニ長調、イ短調のスケール（右手のみ）とカデンツ（左手のみ）が弾け、五線に書くことが出来、コードネームと結び付けて理解できる。
② コード伴奏で童謡や季節の歌を30曲以上歌い弾きできる。
③ バイエル104番程度が弾ける。
④ 童謡の弾き歌い（教本にある伴奏を使用）が30曲以上できる。

2）現場での要求と就職試験課題の傾向

現場で必要とされる演奏技能は学生の実習時の調査（※4）や実習訪問で見る限り、10年間変わることはないと感じている。CDやDVDが豊富になっても、保育者が自身の声で語り、唱え、歌い、伴奏する力はいつの時代も求められるのが現場である。また、就職試験においては、ほとんどの園でピアノの演奏技能や歌唱力、身体表現力を問う課題が課されている。よく、就職試験に実技は必要だが、就職すれば、その他の部分で補いが付くと耳にするが、それは、保育者が苦手な分野を避けているだけで、保育に必要がない訳ではないと考える。さらに付け加えることは、特に、岐阜県内の幼稚園、保育園の就職試験では、95%以上の園でピアノの試験が課されている。しかも、課題レベルもアップしているし、課題量も増えている現状がある。

Ⅲ　基礎技能の捉えかたの変遷

子どもの生活において、音楽による表現活動は子どもの心を開放し、心躍る気持ちが充たされ、情緒の安定に繋がる活動と考える。保育者が子どもと「音楽する仲間になる」「音楽活動のリーダーになる」ためには音楽するための基礎技能を身につける必要がある。学生にとって効率よく学べ、且つ、現場で良く用いられ、就職試験対策にもなる楽器がピアノである。よって表現活動の内容を理解した上でピアノ及び歌唱の技能を学ぶことを中心に捉え、内容を構築してきた。

基礎技能音楽では、1998年から2006年まで、ピアノの演奏技能習得の向上を目指して、授業形態を工夫してきた。その結果、学生のピアノ技能向上に対する効果（※5）はみられ、学期ごとに定めた課題は全員がクリアでき、試験もそつなく弾き歌いが出来、どの学生も技能を習得したかのように見えた。しかし、その割には就職試験で、ピアノ初見での失敗や、試験課題の取組の甘さがみられた。

転機は2007年、四年制大学の男子学生受け入れの始まりであった。以前から表現は担当していたが、2007年から一年生で表現（音楽）を担当することとなった。学生が音楽の基礎を学び理解すると同時に、子どもと楽しく音楽活動をする指導法を学んでいくには、ピアノがほとんど弾けない学生にとってはことさら難しいことだろうか？と、危惧した。しかし、答えは「否」であった。ピアノの演奏技能に関係なく、「音探検遊び」や、「リトミックあそび」、そして、各グループによるストーリーをともなう「手作り楽器アンサンブル」「マリンバ（単旋律のみ）と簡易打楽器アンサンブル」「ハンドベル（単旋律及び複旋律）と打楽器アンサンブル」など、ピアノを使わない遊びを十分楽しんでいる姿を目の当たりにした。彼らはピアノ伴奏で子どもと関わる時よりも、数倍素晴らしい力で音楽を表現している。ピアノという楽器こだわる必要はないでは？と深く考えさせられた。

授業での音遊び活動においては、音楽能力が高く、グループ活動のリーダーとなれる学生が必ずいてくれるので、スムーズに活動が進み、

みなでアンサンブルの楽しさも味わうことが出来る。しかし、現場においては、一人ひとりがリーダーにならなければならない。それだけに、保育の現場では、こどもの表現意欲や創造的な活動を受容する感性と、子どもの表現活動を支えるための表現技術を持ち合わせることが必要となる。そこで、学生自身が、音楽の聴く楽しみ、歌う楽しみ、奏でる喜びを感じ、意欲をもってそれらの技能を習得し、表現する楽しさを体験できる授業展開であり、内容でありたいと考えた。そして、もう一度「保育の表現技術」としての「音楽の技能とは?」について検討した。

Ⅳ　学生の活動の転機

2002年より、選択科目において、童謡に対してイメージ化するために、童謡の紙芝居製作と、自分の好きな童謡を繋げてストーリーを作ることや、ひとつの童謡をアレンジしてストーリーに合わせるなどの課題を課してきたが、2008年からはこれらを必修の中にも取り入れ全ての学生を対象とした。

さらに、もう一つの大きな転機があった。2004年から「子育て支援活動」が始まり、グループで取り組め、表現できる活動の実践が求められるようになった。子どもたちと、実際に遊ぶことにより、より顕著に実践課題を得ることとなった。学生は、在学中（2年）に3回、自分で立案、企画、計画、実施の機会を与えられる。この活動を通して学生自身がグループでの表現活動を積極的に取り組むようになった。そして、その活動のために技能が必要となり、主体的に学ぶようになってきた。今までに無かったプログラムで学生に好評な活動は「ドラムサークル」や「リトミック遊び」「わらべうたあそび」であった。つまり、音楽活動を通してコミュニケーション力を求められるようになったことを学生は肌で感じ、その成就のためには基礎的な音楽の知識と楽器の演奏技術の習得の必要性を感じたわけである。

Ⅴ　新カリキュラムの内容と事例

1）科目の配列

従来は、各学期毎に異なった内容の科目を配列していた。それを、平成23年度入学生からは、一年生前期に①音楽の基礎②リトミック③ピアノ④マリンバの4科目を同時期に開講した。今までは、基礎を学びピアノを学び、と段階的に増やしていっていたが、今年度からは一挙に4科目の同時進行とした。子どもと違って、学生は18年間様々な場所で音楽にふれ、体験し、指導を受けている。一例を挙げると、難しいリズムの合唱曲を難なく歌い、AKB48の歌を踊りながら歌うことが出来る力は持っている。（※6）しかしながら、初心者でも、上級者でも、音楽の基礎的な楽典を知り、きちんとリズムを理解し、なおかつそれを身体で表現することが出来る、読譜がスムーズに出来る、ピアノで弾くことが出来る、という力が備わつているわけではない。頭で理解しても、瞬時にリズムを把握し、音を読み、指に伝え、音にする循環がスムーズに繋がらないのである。よって、理解する前によく聴いてその曲を覚え、歌えることが、弾ける事に繋がり、そして、同時にリズムや音程の理解に繋がっていくと考える。

幼児時代は童謡を聴いて、歌って育ち、小・中学生の時代は唱歌、合唱を歌い、ピアニカやリコーダーを体験し、テレビのタレント歌手のまねをし、ブラス楽器を体験し、ブラスバンドに明け暮れた高校時代を過ごした学生には、音楽は楽しみであり、愛するものであり、生涯の趣味であり、大きな心の拠り所であり、癒しとなる存在に位置付いている。その、大切な大切な「音楽」が、ピアノが弾ける、弾けないというだけで好きになる、嫌いになるが変化してはいけない。そのためにも学生一人一人が大切な物として持っている音楽観を守りつつ、その上で、保育者としての技能のピアノ力を付けさせたいと切に願うからである。

2）リトミック遊び

リトミック遊びでは、リズム表現を中心においたが、ハンドサインを使ったドレミ唱法による歌唱（ヘ音記号も含む）や、ピアノ曲の合唱など、ピアノで扱う課題も取り入れた。教室として使用する室内の壁には美術の若杉ゼミ生が、季節の行事や童謡を題材とした壁面構成の作品を飾りつけてくれた。（図1.2）また、校務職員

の方は窓の下に朝顔や風船かずら、マラカスエンドウなどを植えて、環境作りを援助してくれた。これらの作品や植物はその都度、教材の主役になってくれた。

3）ピアノ指導のカリキュラムと新たな取組

音楽を楽しみ、音楽を聴いて心を癒していたのに、ピアノという楽器に出会い「思いの他、練習に時間がかかる厄介な楽器だ」という初心者の苛立ちも考慮して、ピアノ学習の課題には、聞き覚えのある童謡を多く取り入れるとともに、毎週の課題を細かく提示したノートを作った。さらに、到達目標を定めた毎月のチェックテストを設定した。小さな到達点を設定することにより、毎日の練習に明確な目標が持て、練習に励みが出てくることがねらいであった。今回実施した3回のテスト（5月、6月、7月）の内、2回までは全員が期間内に到達できた。

4）基礎とマリンバ

基礎では音楽の簡単な楽典とリズムを中心に学ぶとした。童謡のコード伴奏についても、調と和音として理解をするとしている。演奏は出来ても理論の支えが無くては、今後新しい歌を学ぶ時も、合奏の配置やアレンジも戸惑うことになるからである。はじめは面倒に感じていた学生も、一つ理解できると楽しくなり、興味を持って学んでいった。

マリンバという楽器を取り入れた理由は、本学にはマリンバが13台有り、マリンバの奏法を習得する伝統があるという事と、単音で演奏する事は初心者でも可能であり、興味を持って学べる楽器である事であった。マリンバは、6台、7台を並べての合奏も比較的容易に出来る楽器である。今年度も前期の後半には数曲のアンサンブルを楽しむことができた。

5）後期になり前期改定カリキュラムの効果はどのようであったか？

本年度、後期に入り、三分の一（5回）の授業が終了した。授業の中で特に感じることは、童謡の弾き歌いの習得が早いことと、楽しく歌えることにある。質問紙等の調査は行っていないが、1年生を担当している5人の指導者からも、こちらが質問する以前に、感想として語られている事実は大きな成果として捉えたい。

まとめ

学生が子どもと「音楽をする仲間になる」「音楽活動のリーダーになる」という視点を其々の音楽授業に取り入れ、授業内容を構築してきた。

浮き彫りになった点は、技能の捉え方であった。「ピアノが弾けなきゃ始まらない」の概念に疑問を抱きつつも「ピアノの奏法をいかに効率よく身につけるか」という視点に固執していたといえよう。解決策の一つとして、「リトミック」を今以上に取り入れた指導方法と内容を展開していきたいと考えている。

もう一つ大切なことは、非常勤のピアノ担当の先生方に対し、改定に関しての詳細なる理解と「保育の表現技術」への理解、そして指導方法の共有、及び密なる連携を十分に行える役を担うことにあると強く感じた。

Ⅲの「基礎技能音楽」の捉えかたの変遷と、大きな転機となった「子育て支援活動」の表現活動の振り返りから浮き上がってきた問題点の解決を基に再構築し、2011年度からのカリキュラムは現在後期内容をすすめているところである。今後は2年間が終了した時点でもう一度検証をしていきたいと考える。（篠田）

（※1）保育士資格の場合

（※2）初心者とは入学まで、ピアノを習ったことが無い又は、入学が決まってから習い始めた。又は、幼少期に習ったことはあるが、小学校2年生までにやめている学生のこととしている。

（※3）上級者とはソナタ以上の履修があり童謡の70%は初見で弾きこなせる力とする。

（※4）毎年、実習幼稚園4週間、保育所4週間のなかで歌われた曲を学生に記入させた調査結果、曲数やレベルの変化は無かった。

（※5）通常に受講した学生の全員が課題をクリアできるようになった。又、特別な事情が有る学生以外、全員受講できている。

（※6）毎年大学祭ではクラス対抗のダンスや歌が有り、AKBなどのダンス付きの歌を歌っている。

本稿はH 22全国保育士養成協議会第49回研究大会ポスター発表したものを加筆修正し、その後実践報告を加えたものです。

図1）　壁面「山の音楽家」

図2）　右からひなまつり・七夕・十五夜・あめふり

Ⅱ）幼児美術
学生を対象とした粘土造形表現についての考察　～土粘土をつくる～

はじめに

子どもが自らの手で何かを作り出すということは、日常の数ある楽しみの中でも欠かせない活動であり、喜びである。子どもは体全体を使い思い思いの絵を描き、物を作る。本稿では立体表現における活動として、自然の中から実際に採れて使われている土粘土を教材に幼児教育専攻の学生を対象とし、土粘土を使用した造形表現における効果がどのように表れるかを体験、記録し、保育現場での指導の際にどう取り入れていくかを考察することを目的としている。

1. 粘土の種類

幼児、児童教育現場では様々な種類の粘土が教材として使用されている。それぞれに長所や欠点があるが、そのいくつかをまとめてみる。

a. 土粘土

（長所）

・可塑性に優れ、働きかけに対し素直に反応する。

・水の加えかたによって柔らかくも硬くもなり、手になじみやすい。

・陶芸作品にすることも可能である。

（欠点）

・手や服、教室が汚れやすいので作業環境を作ることが厄介である。

・乾燥すると収縮しひび割れやすい。

b. 小麦粉粘土

（長所）

・衛生的で、口に入れても安全である。

・粉の状態に水とのりを加えながら少しずつ感触が変わっていくことを楽しむことができる。

・着色も可能である。

（欠点）

・一度乾燥させると再利用できない。

c. 油粘土

（長所）

・縮まない

・手や教室が汚れにくいため後片付けがしやすい。

（欠点）

・油っぽく弾力があるため働きかけに対しての反応が弱い。
・硬くてくっつきにくい。

d. 紙粘土

(長所)
・収縮が小さく、ペットボトルなどを芯材に使用できる。
・着色も可能である。
(欠点)
・手にべとつきやすく、繊維の絡みによって作業中にひびが入ったりすることが多い。

以上の 4 種類の粘土の中で、一番可塑性に優れ子どもが体全体を使って造形活動ができ、自然の中から採掘できる素材であり安価である土粘土を使用する。

2. 土粘土について

土粘土は、一般的に陶芸用粘土として使われており、縄文時代から土器や埴輪などの造形素材として使われてきた。瀬戸や信楽、また多治見などの土壌には粘性のある土が多く採れ、それぞれ焼き物の産地として知られている。筆者が幼い頃山に遊びに行ったときにスコップで掘った土に粘り気があり、その土で造形して遊んだことを思い出す。土粘土が実際の自然の中にある素材であるということをきっかけに、子どもが砂遊びや畑での土遊び、どろんこ遊びをする延長として、粘土という素材を作り、その粘土を使用した造形活動に繋げていくことができる。

3. 指導方法

学生 4 人を 1 グループとし、135cm × 178cm の机にビニールシートを敷いて使用。全 4 グループで行った。粘土は信楽土、道具はボウル、バット、木槌、ゴムハンマー、ふるい、ネンドベラ。

①事前に土粘土を細かくちぎって天日干しし、完全に乾燥させた小さい塊や粉を各グループに約 5kg ずつ配り、匂いやそのカチカチの感触を確かめさせる。それと同時に、グラウンドや公園、畑などの普段触れる土との違いや共通点などをディスカッションさせる。目の前にある土が特別なものではない一見普通のものであるということを確認させる。

②木槌やゴムハンマーを使用し、乾燥した土の塊を叩いて砕き、ふるいにかける。

図 1. 乾燥した土の塊を叩いて砕く

図 2. 砕いた土をふるいにかける

あらかじめ小さい破片の状態にしておいたため、あまり力を加えなくてもすぐ粉々になる。中には大きな塊もあり、強く叩かないと砕けないものもあるため、破片が飛び散らないようにする準備が必要であった。ふるいにかけることによりさらさらの砂のような質感を確認することができる。ふるいの網の荒さを変えることにより、粉状のものや粒状のものが出来上がる。先ほどまでカチカチの塊だったものが少しの操作で見た目と質感がガラリと変わることを体験させることが目的である。

③ふるいにかけた粉状、粒状のものをボウルやバットに入れ、そこに少しずつ水を加えながら土の表情の変化を体験する。4 人のグループの中でそれぞれ意図的に加える水の量を変え、練

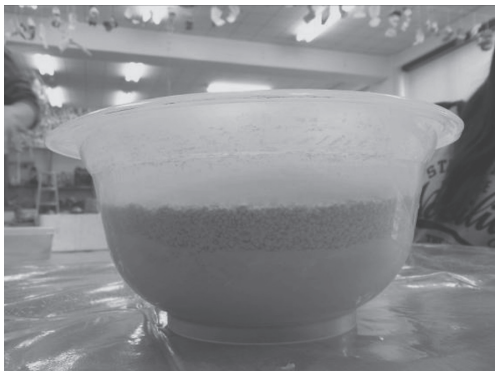

図 3. ふるいにかけて粉状、粒状になった土

らせていく。このときはまだ何を作るかというテーマを与えず、素材そのものの質感や重量感を体感するという活動に重点をおく。水を多く含ませた学生はあっという間にドロ状の粘土になり、泥んこ遊びをしているような様子をみせ、水を少しずつ加えた学生は粉が粒になり、少しずつ粘りがでていくことに新鮮さを感じていた。逆に、あまりふるいにかけていない粒状の土に水を加えてもなかなか粘性が出ず、力を入れてつぶすように練っていた。そして、それぞれが思い思いに練っていく過程の中で「ちょうど良い柔らかさ（耳たぶぐらい）」を発見し、作品制作に繋げていく。

図 4.5. 水を加えて粘土にしていく

4. 造形活動

乾燥した土の塊→粉→粘土のようにひとつの素材が少し手を加えることでいろんな質感に変化して行く体験をすることができる土粘土は、加える水加減により様々な触感を得ることができる。みずみずしいツヤを感じることも、ツルツルにすることも、カサカサな表情を表現することもできる。教育現場では紙粘土や小麦粉粘土の場合、着色することが可能であることから「色を塗れば良い」と、表面の質感を省略する傾向がある。しかし土粘土の場合は着色ができないため、作りたいものの表面的な質感を表現することへの工夫を求めることが可能である。今回学生に「好きな食べ物」をテーマに作品制作をさせた。

図 6. 丸めてドーナツを作る

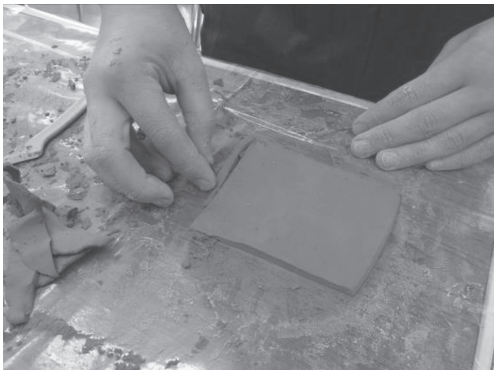

図 7. 薄く伸ばしてヘラで細く切る

5. 結果、考察

「～を作りたい」という思いを表現するために、丸めたり、叩いて伸ばしたりヘラを使って切ったりなど、触感による大きさ、厚さなどの変化や粘土どうしをくっつけるための工夫など、様々な塑像表現の仕方を体験することができた。また、作りたいものにより水加減を変えた粘土を組み合わせることによって質感の違いを表現することもでき、作ったものに粉状の土をまぶしてさらに質感を変化させる学生もいた。しだいにいろんなグループから「おいしそう」「リアルに作れているね」などという声が上がり、着色せずとも質感の工夫により思い通りの形を作ることができている学生の作品を鑑賞しあい、自分の作品に取り入れる風景もみられた。同じ粘土という素材であっても、粉から作らせることによって知った触感、質感の違いを生かす工夫がみられた。水加減がなかなかうまくいかない学生は最後まで手のべとつきを気にして思い通りの作品にならなかった場合もあった。平面領域での制作において普段消極的な学生が粘土制作ではのびのびと楽しく表現することができていた。

初めから使いやすく柔らかい状態の粘土ではなく、いろんな表情を持つ土という素材を目で見て、触れさせることから授業を始めたのだが、個々の感想シートには「粉から粘土を作るまでの過程は大変であったが、その分作品が出来たときの達成感が大きかった」「水の分量を調整するのが難しかったが、それによって出来上がる粘土の質感が様々になる」「石のように硬い塊からさらさらの粉になって、それが粘土に変化していく感動を子どもにあじわってもらいたい」などの意見があった。

おわりに

本稿は将来保育現場で指導する立場になる学生を対象とした粘土造形活動のひとつの考察である。子どもにとって新しい遊びとの出会い、新しい道具や新しい素材との出会いはかけがえのない瞬間である。その感動を伝えるためには指導する側がそのものについての勉強や体験を

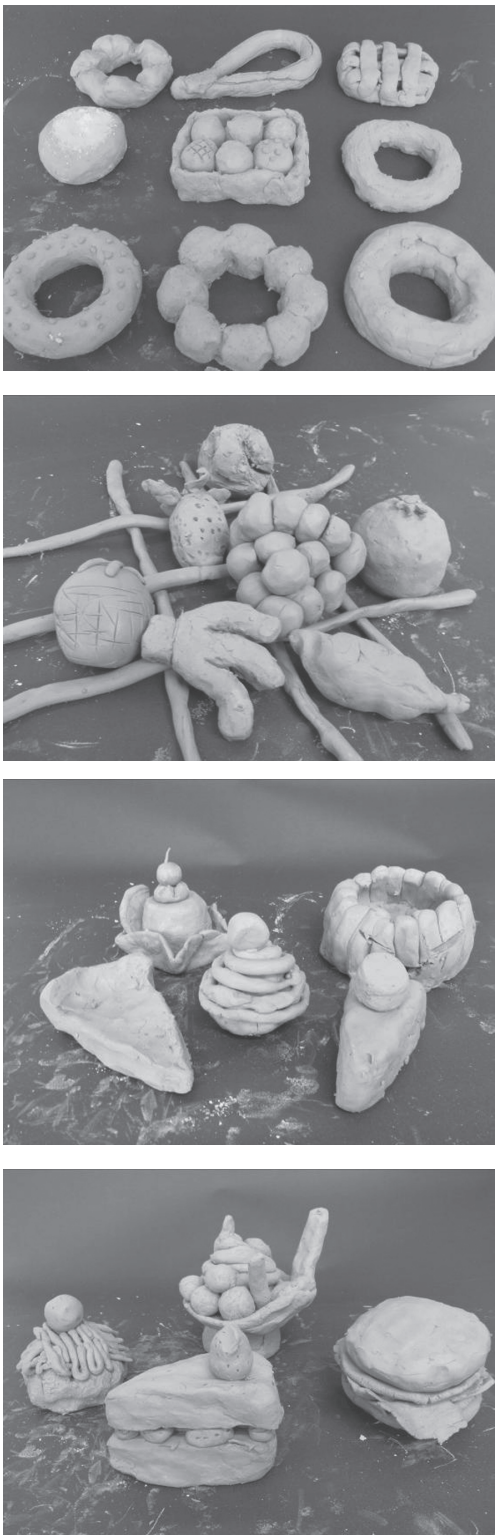

図 8.9.10.11. 完成作品

するべきであり、今回その体験をすることにより保育現場で子どもに伝えることができるきっかけになったと考えている。子どもたちが自らによってその素材に手を加え、変化していく様子を目と手、また体全体で体感し、表現活動を通して自分の作りたい形に近づくような手助けをする指導者になることができるような授業を今後も進めていきたい。（中島）

＜参考文献＞

熊本高工　表現の指導　造形　同文書院
成田孝　心おどる土粘土の授業　黎明書房